

報告書

「カリフォルニア州高校生のための日本語研修プログラム」
 における静岡県立大生の国際交流活動：
 ランチパートナーとカンバーセッションパートナー

Hosting Students' Participation in the
 "University of Shizuoka Japanese Program for California High School Students":
 As Lunch Partners and Conversation Partners

澤 崎 宏 — Koichi SAWASAKI

1. はじめに

「カリフォルニア州高校生のための日本語研修プログラム」は、静岡県とカリフォルニア州の間で長年にわたって行われている友好交流に端を発して実現した、4週間の短期語学研修プログラムである。¹ 静岡県立大学が受け入れ機関となり、初級日本語学習者（高校生）のためのプログラムを企画・実施した結果、2007年に2人、そして2008年には4人の参加者を得た。下のスケジュール（表1）に示すとおり、日本語研修に加えて、静岡県立大生との交流、特別講義、授業見学など、大学色を盛り込んだメニューが特色である。両年とも、決して多い参加者（以下、高校生）とは言えないが、このためにボランティアでプログラムに係わった静岡県立大生（以下、県大生）の数は、2008年だけでも90名近くにのぼり、かなりの学生が高校生達と触れ合うこととなった。

本稿では、2008年プログラムで県大生に係わった交流活動の中から、特にランチパートナー(LP)とカンバーセッションパートナー(CP)の2つを取りあげ、その活動成果を報告する。以下、県大生から提出された活動報告を基に、(i) LP/CPが単に会話をする場から、日本語を教える場へと意識が変わっていったこと、(ii) しかし日本語を教えることはそう簡単ではなかったこと、(iii) 県大生にとって言語的達成感が比較的早い段階で起こり、プログラム終了時には異文化理解の達成感が増加する傾向があったこと、(iv) 高校生へのアンケート結果から、LP/CP活動は高い評価を得たことなどを中心に述べる。

1 静岡県とカリフォルニア州は、昭和56年に情報交換、人的交流などに関する合意書を締結し、平成14年には災害時の危機管理などに関する協定書を締結している。

表1 カリフォルニア州高校生のための日本語研修プログラム(2008年スケジュール)

1 週目	9:10-12:00:00	12:00-13:00	13:10-14:00	14:40-16:10	16:20-
6/28 土	成田空港着				
6/29 日	ガイダンス&市内見学				
6/30 月	ガイダンス	LPと昼食	ガイダンス		
7/1 火	日本語授業	LPと昼食	県立大授業訪問	学長室訪問	
7/2 水	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	CPと活動	歓迎会
7/3 木	日本語授業	LPと昼食	特別講義(お茶)	CPと活動	
7/4 金	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	CPと活動	七夕祭り見学
2 週目					
7/7 月	日本語授業	LPと昼食	高校訪問		
7/8 火	日本語授業	LPと昼食	県立大授業訪問		
7/9 水	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	CPと活動	
7/10 木	日本語授業	LPと昼食	高校訪問		
7/11 金	日本語授業	LPと昼食	県立大授業訪問	特別講義(能入門)	
3 週目					
7/14 月	日本語授業	LPと昼食	高校訪問		
7/15 火	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	CPと活動	
7/16 水	日本語授業	LPと昼食	高校訪問		
7/17 木	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	CPと活動	
7/18 金	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	CPと活動	
4 週目					
7/21 月	海の日(休校日)				
7/22 火	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	県立大授業訪問	
7/23 水	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	CPと活動	
7/24 木	日本語授業	LPと昼食	日本語授業	日本語授業	修了式&送別会
7/25 金	フィールドトリップ(富士山・白糸の滝・浅間神社)				
7/27 日	静岡出発				

注: LP = ランチパートナー, CP = カンバーセッションパートナー

2. 米国の高校における日本語教育の実態

具体的なLPとCPの活動報告に移る前に、まず米国の高校における日本語教育の実態と、静岡県立大学における日本語教育の現状について軽く触れておきたい。

国際交流基金(2007)の『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2006年－』を見ると、米国の高校における日本語教育について次のことがわかる。² まず、2006年時点で、米国の高校で日本語を学習している学生数は約4万2千人である。世界の高校で日本語を学ぶ学生数は106万人と報告されており、世界との比率で言えば米国はわずか4%であるが、調査対象の77カ国・地域のうち、米国は韓国、中国、インドネシア、オーストラリアに次いで5番目に学習者が多い。

2 本節にある情報は、特にことわりがない限り、国際交流基金(2007)より得たものとする。

報 告 書

また、米国の高校では日本語教師の約62%が母語話者であり、この比率は、学習者数の多い韓国(21%)、中国(10.2%)、インドネシア(5%)、オーストラリア(25.4%)などと較べてかなり高い数値となっている。つまり、米国の高校では、日本語学習が盛んな他のどの国に較べても、現地の非母語話者よりも日本語母語話者が教鞭をとる割合が高いと言える。

次に日本語の学習動機を見てみると、「日本文化に関する知識を得るため」が最も高く、次に「日本語によるコミュニケーションができるようにするため」や「日本語という言語そのものへの興味」といった理由が続く。逆に、「大学や資格試験の受験準備のため」や「日本に留学するため」、「母語、または親の母語（継承語）である日本語を忘れないため」といった理由は低い。つまり、目の前にある特定の目的や条件を達成するためや、特定の家庭環境にあるという理由で日本語を勉強しているというよりも、日本や日本語についてより詳しくなりたいという、内的・統合的な動機づけによって幅広く学習が支えられていることがわかる。

また、2006年より日本語がAdvanced Placement Program (AP)の科目として加わり、新たな日本語教育の展開を示しつつある（国際交流基金, 2008; The Japan Foundation, 2004; 2006）。APとは、大学レベルの授業内容を高校で履修できるプログラムのことで、米国の非営利団体The College Boardにより1955年から始まった。毎年1度行われる試験で一定以上の成績を収めれば、大学進学への内申に有利に働くだけでなく、大学入学後も、単位認定や授業の履修免除などの優遇措置を受けることができる。ちなみに、2007年には140万人の学生が計37科目の中からAPテストを受験している（The College Board, 2008）。その中で日本語は、2007年に第1回テストが行われ、1,300人が受験した（国際交流基金, 2008）。日本語APの開始に伴い、今後高校の日本語教育がどう変化していくか、注目されるところである。³

3. 静岡県立大学の日本語教育の現状

静岡県立大学では、2007年度は約80名、2008年度には約90名の留学生が在籍しており、その90%以上がアジアからの学生である。初級日本語コースや日本語を勉強するためのJSL専用コースはなく、留学生は、学生生活を送る上で初めから語学に支障がないことが前提となっている。日本語の授業は、全学共通科目や学部の第二外国語科目として開講されているが、これらは初級学習者を対象にしていないので、本稿で扱う高校生の日本語レベルとは大きく隔たりがある。

3 APの他に日本語教育で関心の高まっている問題として、2002年に採択されたNo Child Left Behind (NCLB) 法などもある（The Japan Foundation, 2004; 2006）。

4. 日本語研修プログラム：LP/CP活動報告

4.1. LP/LC活動参加者

2008年プログラムのLP/CP活動への参加者は、カリフォルニア州高校生が4人(全員女性)で、平均年齢は16.5歳(15-18)、平均日本語学習歴が1.75年(1-2)の初級学習者であった。一方、県大生は大学内の掲示等により募集され、LP/CPの登録をした30人(男性3人; 女性27人)であった。学年の内訳は1年生9人、2年生11人、3年生8人、4年生1人、修士1年生1人で、約6割が人文科学の領域を専門としていた。LPとCPの別は、それぞれの活動時に時間の都合がつくかどうかや、特定の個人にタスクが偏りすぎないようにといった基準で割り振られており、両方共に参加した県大生が多数いた。なお、LP/CP活動は無報酬とし、支障の無い限り申込者全員が活動に参加できるように配慮した。

4.2. 活動の方法

LP/CPの県大生30人は、表1のスケジュールに示す曜日と時間帯に応じて、予め小グループに割り振られた上で活動を行った。また、1週間毎に活動記録(添付A)を提出することとし、プログラム前の説明会では次のような指示が与えられた。

(1) LPへの指示内容

- a. 予め振り分けられた7人から9人が、学生食堂に集まり4人の高校生とテーブルを共にし、自由に会話を楽しみながら食事する。
- b. 県大生は、なるべく4人の高校生の中に割って入り、会話をリードするよう工夫する。

(2) CPへの指示内容

- a. 高校生1人と県大生1～3人が一組となるようなグループ分けのもと、各グループが大学内の適当な場所で会話を行う。
- b. 高校生にとって日本語の練習ができるように、特にセッションの始まりは意識的に日本語の練習にあてるよう工夫する。
- c. 日本語の練習がある程度終わった後は自由会話に移る。その際英語の使用はある程度認めるが、週を追う毎に英語の比重が減り日本語の量が増すよう配慮する。

以上が事前説明会で示した指示であったが、プログラム2週目が終わった時点で方針を修正し、新たな指示(3)をLP/CP全員に流した。LP/CP活動中に、大学で知り合った他の学生が自然と輪に加わるようになるなどして、会話が英語に流れていく傾向が見られたので、県大生に注意を促し、軌道修正を行った結果である。

報 告 書

- (3) 3週目以降の修正指示：英語をなるべく使わず、日本語を用いた会話を心がける。

4.3. 調査の方法

本調査は、LP/CPの県大生が毎週提出した活動報告に基づいている。LP/CPは、週毎の活動報告を所定の書式により提出することになっており、報告書は以下の3つの質問に答えるものであった（添付A）。

- (4) a. 最初の日本語の練習のとき、どのような工夫をしましたか。それに対しての成果はありましたか。反省点がありますか。
 b. 日本語の練習後の自由会話では、お互いに学び合うような会話になりましたか。なったとすればそれはどんな点ですか。達成できたこと、反省点などを書いて下さい。（言語的側面、文化的側面など）
 c. 上記以外で、次週への課題があれば書いて下さい。最終週の場合は、今までの総括を書いて下さい。

4.4. 調査の結果

以下、回収された報告書の中から、特徴的なコメントを選んで報告する。プログラムの途中から終了後までの間に回収された報告書の総数は、1週目報告が23通、2週目報告が12通、3週目報告が4通、4週目報告が14通の計53通であった。本稿では、これらを初回報告23通（第1週）、中間報告16通（第2週及び3週）、最終報告14通（第4週）の3つに分けてまとめる。また、前節(4)の質問事項に対する回答を、つながりがわかりやすいように「工夫・取り組み」、「反省点・今後の課題」、「満足・成果」の3項目に振り分けて紹介していきたい。（本節で触れることができる項目には限りがあるため、より詳しい報告内容は添付Bを参照されたい。）

4.4.1. 工夫・取り組み まず「工夫・取り組み」については、会話相手としてのLP/CPから、日本語を教える教師役としてのLP/CPへと県大生の意識が変わっていったことがコメントから見てとれる。例えば初回報告では、(5)に示すように、「簡単な日本語を話す」や「ゆっくりと話す」などの、自分達の日本語をわかってもらうための工夫についてのコメントが圧倒的に多かった。

- (5) 初回報告：
 a. 簡単な日本語を使い、ゆっくり話すようにした。(14人)⁴
 b. 単語を強調して、通じるように話した。
 c. 同じ文を2回繰り返して話した。

4 () 内の人数は、類似したコメントも含めた数を掲載した。

それに対して、中間報告と最終報告では、何かを「日本語で説明してもらおう」や習った日本語を覚えているか「質問する」といった、高校生の理解だけでなく、相手に発話を促す工夫について述べるコメントが散見されるようになった(6 abc)。

(6) 中間・最終報告：

- a. 相手が日本語を使うように仕向けた。(5人)
- b. 習った日本語について、質問したりクイズをだしたりした。(3人)
- c. 英語の俗語や言い回しなどを、日本語で説明してもらった。
- d. 相手の日本語のレベルにあわせて話をするようにした。

「習ったことについて質問する」という行為は、単なる会話相手としてのLP/CPにとどまらず、積極的に日本語を教えていこうという意欲と工夫の表れだと言える。このことは、(6 d)のような、会話相手に応じて日本語を使い分けていくというコメントからもうかがえる。

会話の相手から日本語を教える教師役として、LP/CPが意識を変化させていったことは、4.2節で述べた追加指示(3)がある程度影響していると思われる。つまり、LP/CPのような活動を行う際に、学生に報告書を書かせて終わりにするのではなく、プログラム運営者からのフィードバックや両者の意思疎通が、活動を成功に導くための鍵となることを示唆している。

4.4.2. 反省点・今後の課題 次に「反省点・今後の課題」としてあがったコメントを読むと、前節の「工夫・取り組み」で述べた「積極的に日本語を教える」ことが、実はそう簡単ではなかったことがわかる。まず初回報告では、「話題を広げ、話を持続させること」に苦心した様子が見てとれる(7 ab)。また、日米の文化に目を向け、異文化間のコミュニケーションを図りたいと願う気持ちも表れている(7 c)。

(7) 初回報告：

- a. 会話が広がるようにしたい。(6人)
- b. 話が続かなかった・広がらなかった。(3人)
- c. 日本やアメリカのことをもっと話したい。(6人)

しかし中間報告では、(7)に代わって、「英語での会話が多くなった」という反省が多く寄せられた(8 a)。これは、前節(6)の「日本語で説明してもらおう」という取り組みが、実はあまり成功していなかったということかも知れない。

(8) 中間報告：

- a. 英語での会話が多くなった。(6人)

報 告 書

- b. 日本語をあきらめさせないようにしたい。

(8)に似たコメントは最終報告においても多数を占め（5人）、なるべく日本語を使うように工夫したにも拘わらず、初級学習者と日本語を使って話を続けることが容易ではないことを、県大生は身を持って知ったと言える。

4.4.3. 満足・成果 最後に「満足・成果」としては、言語的達成感が比較的早い段階で起こり、プログラム終了時には異文化理解の達成感が増加する傾向があった。まず初回報告を見ると、日本語や英語の語学面に関する満足度が高く(9 ab)、英語を話す好機を得たことに触れる県大生もいた。日本語LP/CPに登録する動機として、英語学習の側面を無視できないことがわかる。一方、この時点での文化理解に関するコメントは少数にとどまった(9 c)。

(9) 初回報告：

- a. 自分の日本語を理解してもらえたようで嬉しかった。（9人）
- b. 日本語と英語を織り交ぜて話すことができた。（4人）
- c. 日米の文化について話した。（2人）

語学面での成果は続く中間報告でも多く挙げられたが、最終報告では、語学以外の点にも言及したコメントが目立つようになった。日米の文化について理解を深められたことや(10 c)、LP/CP活動全体をふり返っての全体的満足感(10 d)を示すコメントが多数を占めた。

(10) 最終報告：

- a. 英語と日本語を教え合っておもしろかった。（2人）
- b. 最初は英語で意思疎通していたが、日本語の比重が増えていった。（3人）
- c. 文化や価値観の違いについて知ることができた。（6人）
- d. 楽しかった / 良い刺激になった / また参加したい。（11人）

「日本語を教える」ことを達成するのはなかなか難しいことを前節で述べたが、「文化理解」に関しては満足度が比較的高かったと言える。これは、前節(7 c)で挙げた「日本やアメリカのことをもっと話す」という課題が、ある程度達成されたと解釈できるだろう。

5. 高校生によるLP/CP活動の評価

これまで、県大生によるLP/CP活動を報告してきたが、カリフォルニア州高校生

はこの活動をどう受けとめたのであろうか。プログラムが始まって3週目の終了時に行った中間アンケートによると、LP/CP活動は高校生から非常に高い評価を得ていたことがわかる。

アンケートは、LPとCPの2項目を含む計19項目について、1点 (poorly designed) から5点 (excellent)までの点数評価を求めたものである。その結果、全項目の平均点が3.9点 (Max 5; Min 2; SD .83) に対し、LPが4.5点、CPも4.5点という結果を得た。これは、「七夕祭り見学」、「高校訪問」、「ホームステイ」に続く、4番目に高い評価項目であった。

しかし、プログラム終了時の自由回答式アンケートでは、LP/CP活動に対する改善点も高校生から指摘されていた。例えば、「LP/CPは優しく、あきらめずに自分達と接してくれた」といった感謝のコメントに混ざって、多数ではないものの、「LP/CP が1度に4人以上になると日本人同士が会話を始めてしまい、LP/CP活動として機能しなくなる」や、「いつもLP/CPと一緒にいると疲れることもある」といった声も挙げられていた。プログラムを運営する側にとって、なるべく多くの県大生に高校生と係わりを持ってもらいたいという「ねらい」と、LP/CPを通して高校生の語学面での向上を目指したいとするもうひとつの「ねらい」があるが、このコメントは、ふたつの「ねらい」が必ずしも両立しないことを示唆するものであった。

6. むすび

本稿では、2008年「カリフォルニア州高校生のための日本語研修プログラム」において、県大生が係わった交流活動の中から、特にLP/CPをとりあげ、その活動成果について報告した。週毎に提出された活動記録の内容に基づき、「工夫・取り組み」、「反省点・今後の課題」、「満足・成果」の3項目に焦点をあてながら、県大生のコメントをまとめたところ、以下のことがわかった。まず「工夫・取り組み」の点では、会話の相手としてのLP/CPから、日本語を教える教師役としてのLP/CPへと県大生の意識が変わっていったことが確認できた。「反省点・今後の課題」の点からは、日本語を教えることが県大生にとってそう簡単ではなかったことがうかがわれた。最後に「満足・成果」という点で見ると、言語的達成感が比較的早い段階で起こり、プログラム終了時には異文化理解の達成感が増加する傾向があった。また、LP/CP活動は高校生から高い評価を得たものの、交流活動と語学支援の目的を同時に満たすことの難しさも示唆された。

最後に、本論では触れられなかったが、LP/CP活動をプログラム運営者が主導する際の労力について触れて稿を閉じたい。今回県大生から寄せられたコメントに、「なぜあそこまで学校（先生？）が彼女たちに尽くしまくるのか疑問だった。（中略）自分も向こうに行ったらそんな風にされたい」というものがあった。このコメントが

報 告 書

示すように、本プログラムの全期間を通して、LP/CPの募集、指示、活動の観察など、プログラム運営スタッフにとってかなりの労力がLP/CPのために費やされることとなった。その結果、このような形で活動をふり返ることができている訳であるが、タスクフォースに余裕がない場合においては、LP/CPの活動は学生の自主性に任せ、プログラム運営スタッフの関与を軽減させる工夫が必要である。関与しすぎや放任しすぎといった両極に陥ることなく、両者の間でほどよい位置を保っていくことが、今後もしこのような活動をしていく場合には肝要であろう。

謝 辞

LP/CP活動を通して、とりまとめ役をして下さった鈴木淑乃さん、土屋季巳江さん、ご教示を頂いた藤巻光浩先生に感謝します。また、プログラムの運営にあたり、一緒に係わって下さった小田原章さん、落合芳彦さん、井口正嗣さん、吉村紀子先生、八木公生先生、寺尾康先生、武田修一先生、坪本篤朗先生、岩倉さやか先生、近藤隆子先生、仁科明先生、カーク・ハイド先生、青山知靖先生、津富宏先生、湖中真哉先生、森陽子先生、岡田久美先生、シスリー悦子先生、縣裕子さん、スコット・キーンさん、熊谷美登理さん、仲野有妃子さん、鈴木かおりさん他、ご協力下さった多くの皆さまにお礼申し上げます。なお、本報告に関しての不備や誤りは、全て著者の責任です。

参 考 文 献

The College Board. (2008). Japanese language and culture: Course description (2009-2011).

http://apcentral.collegeboard.com/apc/public/repository/ap_08_japanese_coursedes.pdf (2008.11.1取得) .

国際交流基金 (2007) 海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2006年－
凡人社

国際交流基金 (2008) 日本語教育国別情報 2007-2008 年度：米国

<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2007-2008/usa.html>
(2008.10.29取得)

The Japan Foundation. (2004). AP Japanese language and culture to debut in 2006-2007. The Breeze (The Japan Foundation, LA Office), 31: 11-13.

The Japan Foundation. (2006). The second annual symposium on Japanese language education in US, by The Japan Foundation, Los Angeles. The Breeze (The Japan Foundation, LA Office), 32: 3-14.

添付A. LP/CP週間活動報告書

2008カリフォルニア州高校生のための日本語プログラム ランチパートナー(LP)及びカンバーセッションパートナー(CP) 週間活動記録				
第	週の活動	提出日: 月 日		
<div style="text-align: right; margin-bottom: 5px;"> 年 学部 学科 名前: </div> 活動内容: それぞれの回の活動について内容を表に埋めて下さい。				
	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目
LP/CP の別				
日時				
会話相手				
場所				
1. 最初の日本語の練習のとき、どのような工夫をしましたか。それに対しての成果はありましたか。反省点がありますか。				
2. 日本語の練習後の自由会話では、お互いに学び合うような会話になりましたか? なったとすればそれはどんな点ですか? 達成できたこと、反省点などを書いて下さい。(言語的側面、文化的側面など)				
3. 上記以外で、次週への課題があれば書いて下さい。最終週の場合は、今までの総括を書いて下さい。				

報告書

添付B. LP/CP活動報告内容の詳細

(文体などの統一性を図るため、実際の表現にいくらか修正を施してある。)

工夫・取り組み

初回報告 23人

言語：

- *日本のお笑い芸人や好きなアーティストたちのことを話題にして、楽しみながら日本語が学習できるようにした。
- *自己紹介の練習をした。
- *助詞が抜けたりしないように、なるべくきれいな日本語で話した。
- *シンプルな構造の文を使うように心がけた。/単語を強調して、通じるように話した。/簡単な日本語を使い、ゆっくり話すようにした。(14人)
- *です・ます体を使った。(2人)
- *同じ文を2回繰り返して話した。/知らない単語があったときに、その言葉を言い換えて教えた。
- *こちらの話がわかりにくいときは、辞書やジェスチャーなどを使った。
- *自動販売機でジュースを買うなど、会話に沿った場面を実際に作って日本語を教えた。(2人)
- *相手から返って来た日本語が片言であっても、なるべく文章に直して教えてあげた。
- *日本語でわからない言葉があると、英語で説明した。/日本語で話すよう無理強いするのは避けた。/日本語・英語で、お互いの言葉を教え合った。(6人)
- *絵描きクイズをして日本語の単語の練習をした。
- *なるべく日本語のみの会話をするように心がけた。

異文化理解：

- *日米で共通している、「ディズニーランド」などの話題を取りあげた。

その他：

- *お互いの趣味や好きなものについて話すことで、飽きないように心がけた。

中間報告(16人)

言語：

- *「今日はどんなことを勉強したの?」と気軽な感じできっかけを作ってみた。
- *その日に授業で習ったことを聞いて、その内容に関するクイズをだした。
- *授業内容やその日の出来事を日本語でたくさん話してもらうようにした。(2人)
- *相手が英語で話し始めても、すぐさま日本語であいづちを打ったり質問したりすることで、日本語で話すという意識をもってもらうようにした。
- *すぐにあきらめて英語で伝えるのではなく、他の日本語で言い換えるなどして日本語で伝えるように努力した。/わからない単語があるときは、辞書やジェスチャーを使った。
- *相手が話したあることに対して詳しく尋ねたりして、なるべく日本語のoutputを増やすようにした。
- *英語の俗語や言い回しなどを日本語で説明してもらった。
- *相手がわからなかったときだけ英語を使うようにした。
- *ホームステイ先のことや週末について聞いた。
- *役立つ日本語をノートに書いて教えた。
- *相手の身近にあるもの、とった行動をもとにして、「そういうのを××って言うんだよ」と教えた。

*ゆっくり話すようにした。(5人)

*丁寧語を使って話すようにした。

最終報告14人

言語：

*相手に無理にならない範囲で新しい単語を使って話すようにした。

*極力英語を使わないようにした。

*相手が英語で話すことがあったので、日本語を使うように仕向けた。(3人)

*わからない単語は辞書で調べたり、ジェスチャーを用いたり、紙に書いて説明するなどした。

*その日に勉強した日本語表現や漢字について質問するよう心がけた。(2人)

*会話の雰囲気崩さないようにバランスを考えながら、「です・ます」体も使って話をした。

*相手の日本語のレベルにあわせて、語をするようにした。

*わかりやすい日本語で話した。(2人)

満足・成果

初回報告 23人

言語：

*簡単な日本語の単語を選んで話したら、理解してもらえたようで嬉しかった。

*ゆっくりはっきりと話し、です・ます体を使ったらよく聞き取ってもらえた。(2人)

*簡単な言葉で話したので、会話がうまくできたと思う。(2人)

*同じ文を2回繰り返すと、理解してくれたと思う。

*七夕だったので、浴衣を着せてあげながら話をしたら、会話がはずんだ。

*会話の内容に合った場面を作る工夫をしたところ、わかってもらいやすかった。(2人)

*我々CP/LP達は、自分の英語の勉強よりも、高校生達の日本語学習にとっても協力的であった。

*新しく学んだことをノートにメモしてくれていて嬉しかった。(2人)

*日本語と英語をおりまぜて話すことができた。/難しい日本語を英語で説明したらわかってくれた。/英語の/r/と/l/の発音の違いを教えてもらった。/英語を話すことで、会話が途切れず続いた。

*覚え立ての大阪弁を教えてくれた。

異文化理解：

*日米の文化について話した。(2人)

*英語での日常表現を教えてもらい、アメリカの外食産業などについても話した。

*日本のカタカナ発音について話題になった。

その他：

*いつもみんな楽しそうに見えた。

*自分もアメリカに住んでいたことがあるので、共通の話題があって良かった。

*英語を話す機会があってよかった。

中間報告(16人)

言語：

*丁寧語でゆっくりと話す相手の理解度が向上した。

*相手の身近にあるものやとった行動をもとにして日本語を教えていくと、言葉で言いにくいことも理解してもらえた。/今週は、会話の中でいくつか日本語のことばを教えることができた。

*リスニング力が向上していた。/新しい語彙も多く習得していた。

報 告 書

*英語の俗語や言い回しなどを日本語で説明してもらったところ、いつもこちらが教えるという立場が逆転してお互いに新鮮だった。

その他：

*週末に何をしたかの（英語による）話で盛り上がった。

*ホームステイのことを聞いたり音楽の話をした。

*英米思想概論で教わった話をして、それに対してリアクションをもらえて良かった。

最終報告14人

言語：

*お互いに英語・日本語を教え合っておもしろかった。（2人）

*帰国後メールが届き、漢字が多く使われていて良かった。

*相手が打ち解けて日本語の質問をしてくれるようになって嬉しかった。

*最初は英語で意思疎通していたが、日本語の比重が増えていった。

*日本語で伝わらないとき、どうやって伝えればいいのかを考える良いきっかけとなった。

異文化理解：

*趣味や学校生活の話を通して文化や価値観の違いについて知ることができた。（2人）

*お互いに国の文化を教え合っておもしろかった。（2人）

*映画や好きなアーティストの話をして盛り上がった。

*ちょっとしたカルチャーショックなどの体験を（自分も去年アメリカに行ったので）話した。

*アジアの礼儀正しさとは異なる礼儀正しさを知ったことは有意義だった。

その他：

*趣味が重なっていたので、話が合い楽しかった。

*日本が気に入った・帰りたくないと言われ、とても嬉しかった。（3人）

*最初はそれほどやる気がなかったが、実際にLP/CPの活動をしてみたら楽しく、自分のテンションがあがった。/とても楽しい時間をすごすことができた。/楽しかった。/良い刺激になった。（8人）

*最初は不安だったが、積極的に相手が話しかけてくれるようになったので楽しめた。

*LP/CPの活動がプログラムや相手への貢献になっていれば嬉しい。

*また機会があれば参加したい。

発見初回報告 23人

言語：

*新しく覚えた単語をメモするなどしていたので、熱心だと感じた。

*助詞を抜かさず話すと理解しやすいようだった。

*文をつらつら並べるより、1文ずつ区切って言う方がわかりやすいようだった。

*だいたい日本語が話せるようになっていて驚いた。

異文化理解：

*アメリカでも日本食がけっこう食べられているということがわかった。

*アメリカではおにぎりがとても高いらしく、驚いた。

*電車の乗り方やマクドナルドの、日米の違いを知った。（2人）

*日本や韓国のドラマをよく見ていると聞いて驚いた。

*日本の書店がアメリカにもあって、日本の本が日本語でそのまま売られていることを初めて

知った。

中間報告(16人)

言語：

- *自分達は普段意識していなくても、カリフォルニア州高校生達にとってはめずらしいことがあることを発見した。
- *初めて日本語教科書を見せてもらって、「こうなっているのか」と思った。

最終報告14人

言語：

- *くだけた表現よりも、「です・ます」体の方が相手に理解しやすいことがわかった。
- *日本語がかなり上達したように思う。(2人)
- *疲れているようで、あまり日本語で話してもらえなかった。

異文化理解：

- *自分たちが知らない日本人のバンドを知っていて驚いた。

その他：

- *アニメのキャラクターや歌手など、気張らない話題で打ち解けることができた。
- *通じ合うためには、言葉の巧みさよりも伝えようとする気持ちが大切だと知った。

反省・今後の課題

初回報告 23人

言語：

- *4人の中でも日本語のレベルは様々なので、日本語が得意な子が他の3人に頼られっぱなしにならないように、さりげなく気を配りたい。
- *こちらが一方向的に話しかけるだけでなく、彼女たちが日本語を使えるようにしたい。(2人)
- *英語を使わず、なるべく日本語で話すようにしたい。(2人)
- *会話が續かないことが多かった。「楽しかったですか」「はい」で会話を終わらせず、会話のキャッチボールがうまくできるような努力をする。/会話が広がるようにしたい。(5人)
- *自己紹介以上のつっこんだ話ができなかった。(2人)
- *予め話題を考えてからCP/LP活動に望みたい。(3人)
- *日本語のレベルに個人差があったので、英語での説明が欠かせなかった。
- *次回は、授業で習ったことの練習にもう少し時間を割きたい。
- *日本語で自己紹介してくれたとき、どうしたらもっとよくなるか、具体的なアドバイスをあげれば良かった。
- *相手が理解していないようであれば、こちらから察して、もう一度繰り返すようにしたい。
- *「～なんですけど」や「っていうか」など、正しくない(?)日本語がついつい出てしまった。
- *わかりやすい日本語で話すようにしたい。
- *あまり簡単な日本語ばかり使うと、正しい文法や単語を身につけられなくなるので気をつけたい。
- *食品についての言葉も覚えてもらいたい。

異文化理解：

- *日本のことを詳しく紹介したい。/アメリカのことを色々聞きたい。(3人)
- *もっとお互いの文化について話がしたい。(3人)

その他：

報 告 書

- *ゲームなどができれば良いだろう。
- *楽しみたい。/楽しい会話がしたい。(2人)
- *早く顔と名前を覚えたい。
- *同じようなことばかり聞かれて嫌になっていないか心配だ。

中間報告(16人)

言語：

- *英語での会話が多くなりあまり日本語が使えなかったので、次回からは改善したい。(2人)
- *高校生達が友達になった新しい学生達は、英語で会話をする事が多く、日本語の練習にならなかった。/高校生が疲れてきたようで、英語で話す量が多くなった。(3人)
- *英語で話す人もいたから、高校生達は少し退屈そうだった。
- *日本語をあきらめさせないようにしたい。
- *相手が話そうとしているとき、先走りして口を出さないで、話し終えるまで待つ。
- *漢字や丁寧語などの、日本語の中でも難しい話題が多かったのも、もっと日常的な軽い話題で話すべきだった。
- *自分の日本語が上手く通じず、相手の日本語もうまく通じなくて困った。
- *大学周辺ことを話題にするときは、次からは地図を持参して説明してあげようと思った。

異文化理解：

- *次回はアメリカでの生活について聞いてみたい。

その他：

- *高校生のテンション&疲れを回復させてあげたい。
- *遅れてきた人が合流しやすいように、LP/CP活動の場所を事前に特定しておく方が良い。
- *県大生の人数が多くなると、県大生同士で話してしまうので、グループに分かれた方が良いでしょう。
- *大勢で話していると、隣の人、近くの人ばかりと話してしまいがちだったから、高校生達が会話に参加できていないときもあった。あくまでも彼女達が主役だということを忘れないようにしたい。
- *最近、高校生達が自分達で盛り上がっているのをよく見る。それを邪魔しない程度に話に入っていけるようにできたら良いと思う。

最終報告14人

言語：

- *日本語よりも英語を使ってしまった。(3人)
- *自分の英語力も向上させたいと思った。
- *相手が英語を話すことが多くなったので、もっと日本語を話してもらえるような動機づけを工夫できれば良かった。
- *相手にストレスを感じさせずに日本語をたくさん話してもらうことは難しい課題だった。
- *話のトピックを事前にもっと考えていけば良かった。

異文化理解：

- *趣味や学校生活だけでなく、深い話もしてみたかった。

その他：

- *積極的に行動する姿勢をもっと身につける必要性を感じた。
- *スムーズにLP活動が始められるよう、LP同士で連絡をもっととりあう方が良かった。
- *なぜあそこまで学校(先生?)が彼女たちに尽くしまくるのか疑問だった。すごいもてなしようだな、と思った。自分も向こうに行ったらそんな風にされたい。